子どもたちが陸上競技と出合う場所
順位ではなく「記録」にこそ目を向けて

町内の子どもたちは５月から、この陸上競技大会に向けて練習を重ねてきました。どの小学校も、この季節は学校行事が多いため、その合間をぬっての練習となります。平日の使える時間を目いっぱい使って、一生懸命練習に励んできました。

本大会は町内４校の代表選手が勢ぞろいして開かれます。校内の大会ではなく、この規模でやるからこそ意義があります。自己記録更新にチャレンジする良い機会であるとともに、他校の選手の走りなどを見ることで、一歩外の世界を知ることにもつながります。「校内では１番足が速いけれど、他校の子と比べたら、どうなんだろう…」というように、自分を見つめ直す良いきっかけになると思います。

町内の同じような環境下で育った、同じ年代の子どもたちが、回りを知る初めての機会。どの子も貴重な経験になることでしょう。

５・６年生は全員が何らかの競技に参加します。特定の子だけが選手として選ばれ、他校と競い合うのではなく、全員がベストを尽くすことができる。どの子も平等にチャンスがあります。本大会はそういった大会なのです。

自分自身に精いっぱい挑み、他校の子たちと競い合う。勝つ喜び、負けるくやしさを味わうことで、子どもたちはさらに成長してくれると思います。日々の生活の中での「生きる力」を身に付けることにもつながっているんです。

最近では、体を動かさない子どもが増えたといいます。家に帰っても外には出ず、友達と遊ぶこともしない。遊んだとしても、家の中でテレビゲームをする…。そんな子どもが増えているのは確かなようです。そんな中、この地域ではこの時期、４、５、６年生が授業が終わってからの時間を陸上練習に費やします。体を使って、汗を流し、懸命に取り組みます。「ハードルはどうやったら早く駆け抜けられるのか」「高跳びを高く跳ぶタイミングは」「100メートルはどうしたら早く走れるか」「1500メートルのペース配分は」…。最初は、いやいやだった子どもたちが、先生のアドバイスを熱心に聞くようになり、やがて競技と真剣に向き合う姿勢が生まれてきます。中には自主的に練習を始める子もいるんですよ。朝の登校後、「高跳び用のマットを出してもいいですか」と聞かれて驚いたこともありました。そうやって、自分を高めていく場でもあるんですね。

陸上競技大会は、子どもたちが陸上と出合う最初の一歩。この大会を経験したことで陸上の魅力を知り、その道に進んでいく子もいます。体育の教師を目指す子もいれば、高校の陸上部の監督になった子もいるんですよ。

どの学校でもそうですが、子どもたちには「大会の中で練習の成果を存分に発揮しよう。今までで一番いい記録を出そう。そのために精いっぱい頑張ろう」と話しています。他校の選手との競争であり、自分自身との競争でもある。すべてがチャレンジ。そんな大会なんですね。

保護者の皆さんは、わが子の「順位」だけを見比べるのではなく、その子が出した記録にこそ目を向けて「頑張ったね」とほめてあげて欲しいですね。

榛原地区教育協会副会長
松本晴巳
（本川根小学校校長）

考
陸上競技大会が子どもたちに与える効果とは

体を動かすきっかけに

休日の山村開発センター（上長尾）のロビー。子どもたちがゲーム機を持ち寄り、通信ゲームに夢中になっている。どの子もほとんど目を合わせず、下を向いたまま、もくもくと指を動かし続ける。ちょっと異様な光景だ。そんな子どもたちの姿を、よく見かけるようになったのは、いつの頃からだろう。

野球、サッカー、魚捕り、缶けり…。携帯ゲーム機が一般に普及していなかった少し前の時代。学校から帰ったら、外に出て友達と遊ぶのが当たり前だった。男の子も女の子も、低学年も高学年も関係なく、大きな声を張り上げ、いっぱい汗をかいて、服を泥だらけにしながら、時間を忘れ夢中になって遊んだ。家に帰ると親によく叱られたものだ。

決して「その時代が最高だった」というつもりはないが、子どもが最も子どもらしい時代だったような気もする。

榛原地区北地域陸上競技大会は子どもの身体能力や体力の向上を目的として開かれる。大会に向けた期間中、子どもたちは授業が終わった後、グラウンドに繰り出してそれぞれの練習に励む。最初はあまり乗り気ではなかった子も、みんなで励まし合いながら練習に打ち込むことで、いつしかその競技と真剣に向き合う姿勢が生まれてくる。

体を動かす機会が減った現代の子どもたちにとって、この大会への出場は、身体能力や体力を向上させる効果に加え、精神的な成長をも促していると言っていいだろう。

きずなを深め合う効果も

会場で見かけるのは子どもだけではない。帽子をかぶり、首に保冷剤を巻き付けて観戦する保護者の姿も多く見られた。大きく手を振り、声を枯らして応援する大人たちの姿は、きっと何より励みになったことだろう。

「今日の練習は疲れたよ…」と、学校から帰るなりぐちをこぼす子ども。そんなわが子を優しく見つめ、ねぎらいの言葉をかけた保護者も多かったのではないだろうか。練習・大会を通して、会話が増えた親子もきっと多かったはずだ。

子どもたち同士の連帯感や団結力も高まったのではないか。どの子も、自分の競技が終わったら、すぐに応援席に戻り、自校の出場選手に向けて精いっぱいエールを送っていた。手作りの小旗を振って応援する学校もあったほどだ。団結力、結束力、連帯感…。そんなきずなの成長も見てとれた。

自分の競技が終わったあと、他校の選手と談笑する姿も見られた。子ども同士、新たな交流が芽生えていたのもほほ笑ましい光景だった。

審判、係員など裏方の活躍も忘れてはならない。選手が競技に集中できるよう、細心の注意を払いながら運営に当たる各学校の先生やＰＴＡ関係者たち。ゴールした選手に優しく声をかけると、子どもたちは本当にうれしそうに応えていたのが印象的だった。

今の親が子どもの時代から繰り広げられてきたこの大会。決して、練習の成果を披露するだけの場ではない。きずなを深め、新たな交流を生み、目標を持つ大切さを知り、代表としての自覚を促し、やり遂げた充実感を味わう…。

運営形態は変わっても、毎年さまざまな効果を生み出し続ける陸上競技大会。

来年は、どんなドラマを見せてくれることだろう。

町内新記録達成者

種目	氏名	小学校	記録
1500メートル	宮島洸樹	本川根小	５分20秒５
60㍍ハードル	山下素弘	本川根小	10秒４
ソフトボール投げ	三倉怜	中川根南部小	49.70㍍

取材撮影協力：岩下聡（吉田町）、赤堀景介（菊川市）、山崎雄太（菊川市）